
欲張ったら騙されて？ 戦争の渦中に落ちちゃいました…。

煎餅丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲張ったら騙されて？ 戦争の渦中に落ちちゃいました…。

【Nコード】

N4776Y

【作者名】

煎餅丸

【あらすじ】

死んで特典をもらって転生して、とテンプレ街道を往き始めたと思ったら、気付いたら間桐雁夜のサーヴァントとして現界してしましたとさ。こんなことなら英霊の能力をチョイスしなきゃよかった……。まあ、なったものはしょうがない。生き残るために間桐雁夜と協力しようか。しないと死ぬしね。死にたくないし。つか死んでたまるかい。

P r o l o g u e (前書き)

いろいろとF a t e / Z E R OのSSを読んでたら自分も書きたくなりました。拙い文章ですが、お楽しみいただければ幸いです。

Prologue

『さて、テンプレ通り、と言うのもアレだがさくつと説明すると、君は既に死んでしまっているわけだ』

『
つー！！！』

『はっはっはっはっは、落ち着いて話したまえ。あと悪口その他こちらを不快にする意図ないし結果をもった発言は、音として発することを禁じているので、何を喚こうと無駄だと言っておこう』

『
.....』

『自己紹介は必要かね？ まあ神みたいなものだと思ってくればいい。こうして君の前に姿を現したのは、君に転生するチャンスを与えるためだ。転生先の世界は教えるわけにはいかないが、剣の魔法のファンタジー世界とだけ言っておこう』

『
つー！？』

『二度も説明しないため心して聞く方がいいのだがね？ まあ、こちらは気にせず進めるが、せっかく君にチャンスを与える以上、転生先で簡単に死なれるのも寝覚めが悪い。よってお約束の展開だ。誰もが待ち望む嬉し恥ずかしチート能力っ！！ を、与えてあげよう。さあ、このカタログの中から好きな物を選びたまえっ』

『……………』

『ほう、早いな。ふむ、ふむふむ　　ん……………成る程。随分と欲張ったものだ。まあ安易に【無限の剣製】とか【王の財宝】を選ばない点は好感が持てるが……………じゃあこれを全部叶えてあげよう』

『……………っ！！』

『はっはっはっは、これぐらいお安い御用さ。では良い転生をね』

はい。以上、瞬間的な回想終了。

死んでチート能力&ボディを得た俺は、こうして転生をした、はずだったのだが……………。

「こ、こいつが……………バーサーカー……………」

俺の目の前では、パーカー着た半死人が左半分の引き攣れた痛々しい面貌で、おまけに片眼から血涙流してこちらを凝視していた。

視界の隅々まで意識を向けて見ると、なんとも不気味で薄暗い室内だった。こっ、ねっとりとした生臭い空気がね、視て解るほどに色濃く充満しているというか、吐き気を催す汚臭というか、とにかく一秒だってここに居たくないと思わせる場所だった。

おまけに室内の穢れを凝縮したような存在自体を許したくない物

体　老体が背後に居るような気配を感じる。この身体が備える直感スキルからもたらされる感覚が、それを即座に排除せよと現在進行形で俺に訴えかけている。

ああ、この部屋の内観、すつつつごく、見覚えあつた。個人的に神ゲーである『Fate/stay night』の間桐家の地下室、つまり蟲蔵の中ではありませんかっ!!？

野郎……どこが剣と魔法のファンタジー世界、だよ……。そんな明るいイメージのもんじゃねーよ、暗くて昏くて黒くて殺伐としてとにかく厳しい世界観が持ち味という人外魔境の只中にぶち込みやがって……。

眼前の半死人は白髪だったり、左眼が白く濁つて失明していたり、土気色の皮膚だったり、針金とモヤシの合いの子のような枯れ木じみた体格だったり、その特徴的な容姿から、間桐雁夜に間違いないだろう。ってことは今つて『Fate/ZERO』かよ。

彼の身長は設定で173cmだから、現在の俺のタツパより12cm低いことになる。よつて、向こうはこちらを見上げる形となり、こちらは向こうを見下ろす形となるのだが……。……覚悟つて言うのかな？　何というか死にかけの鼠が猫に一矢報いる時に見せるような、威圧されるものを感じる。

まあ、彼と間桐桜の境遇を考慮すれば、命を賭してサーヴァントの召喚に臨んだのは確実である。

その凄味をそのままに俺に向けられるということは、これつてアレだよな？

テンプレ的展開になるんだよね？　幾らチート能力をゲットするというテンプレ展開はギリギリで容認できても、これはちよつと看過できないんです……。……。

しかし認める他ないのだろうな。ああ、つまり、そうなんだろうな。

この身が、サーヴァントとして、しかもバーサーカーとして、さらに言えばよりもよって、殺人鬼フリーターよりも最弱な間桐雁夜をマスターとして召喚されたっつーことなんだよなああああっ！！！！？

あ、コレってどう考えても詰んでね？ 俺、第二の人生ソッコーで終わった……………いや、待て待て待て。俺、諦めるな。安西先生のありがたい言葉を思い出せ。不撓不屈とか言わないけど、いきなり諦めたらあかんよマジで。

取り敢えず、今の状況を整理しよう。あと、俺の状態を把握しよう。でなきや生き残れもしないし、雁夜の復讐劇にただ巻き込まれるだけ巻き込まれて使い潰されてしまう。間桐臓硯という人外の妖怪蟲爺も居ることだし。

でも現状で列举できる判断材料も少ないな。

- ・現在はまぎれもなくバーサーカーのサーヴァントとして現界している。
- ・理性を失ってない。俺が第五次よりも曲者揃いの第四次聖杯戦争で戦うとか虐めかよっ！？
- ・状態確認。一応特典の余録としてステータス確認できる機能を与えて貰っているから、それで確認。

うん、こんなところか。

現在の容姿は、眼前の雁夜さんの瞳に映る自身の姿を視認するに、無事に『TYPE - MOON』の設定資料集に載っていた旧セイバ

ー（つまり男版アーサー王）の御姿となっている。

ステータスを確認したところ、要望通りのパラメーター、多様なスキル、多彩な宝具と不備がない。

んん？ クラス別スキルの狂化スキルがランク無しか。このおかげでパラメーターのランクアップがない代わりに、狂戦士にならずに済んでいるようだ。でもクラスはバーサーカー……意味ねー。

ふーむふむ、なら取り敢えず、殺るか。毒蟲を。

今を逃すと、多分できんだろうし？ まあ本体じゃないかもしれないけど、マスターである雁夜に貸しを作る意味でも、ココは殺つとかないといけないワケで。

俺は自身の宝具となった不可視の聖剣を実体化させる。そして対象を視界に捉えず、極力予備動作を雁夜と、特に間桐臓硯に気取らせないよう注意して、聖剣を覆い隠す役目を持つ【風王結界】を解放した。

違和感など与えない。何故ならこれは、歴とした不意打ちなのだから。

そもそも、【風王結界】は卑怯なのである。透明化による視覚妨害で武器を隠すし、それ自体が風であるために剣身を振るう際の風切り音すら微妙且つ不規則に変調させるし。

こんな真似されたら、両腕、特に手首から下の握りと動作でしか太刀筋が判らない。初見で形状や刃渡りを把握するなんてこと、作中でも佐々木小次郎以外の英霊ができないことから、まず至難の業だろう。

剣術の達人が肉体の動作によって、正面から堂々と不意を突くとかそんな真つ当な手段ではない。卑怯卑劣という言葉が似合う、地味にチートな宝具なのである。

それをまあ、チート特典と称してパワーアップさせたのが、俺の

宝具である【風王結界】ランクB+なのである。

よし、下準備は整った。細工は流々、仕上げを御覧じろ。

「風よ、灼き滅ぼせ」

解き放たれた風の魔力はすでに室内の空気と完全に同化し、間桐臓硯の周囲を埋め尽くしていた。そして、その空気が急速に収縮した。

加圧し、圧縮された空気は熱を発し、魔力という神秘の後押しによつて為されたそれは、瞬時に対象である蟲の化物を超高熱で灼き尽くした。悲鳴すら上げる暇を与えない、まさに瞬殺。

これが【風王熱波（タイラント・エア）】。気圧の変化によつて灼くことも凍らせることも可能な【風王結界】のバリエーションである。

ただし、レンジは狭いし発動に前準備が必要だったり、使い勝手はそこまで良い物でもない、多分サーヴァント相手では使うタイミングはそうそうないだろう。

さて、害虫を焼却処分した際に生じる悪臭は臭いの粒子を【風王結界】で集めて凝結させ、さらに凝固させて部屋の端に棄てると、蟲蔵を黄金の光で照らす聖剣に戻して実体化を解く。

ここからが正念場だ。間桐雁夜。俺は俺が生き残るためにお前を利用する。だから、お前のために力を尽くそう。

え？ 超展開？ 意外過ぎ？ パンピーが調子こいてんじゃね？ うん、いきなり力を与えられて、しかもこんなアホみたいな状況に放り込まれて、乗り気にあるなんてフツーはないよね。

でも考えてみよう。この身はサーヴァントなんです。現界し続けること自体は、特典で得たスキルでまあ可能んだけど、マスターは間桐雁夜になつてるし、彼には俺を律する令呪がちゃんとある

し、あと何というか、雁夜への敵対心とか悪意が湧いて来ないんですよね。

不思議なことに「まあ、こうなったら彼に協力してやるのも吝かではない。ただし、俺が死なない程度でな（キリッ）」って感じに、思考が協調せい協調せい、と傾いているんですよ。まさに不可解で、奇々怪々な精神状況。

俺をこの状況に放り込んだ存在の作為的な思考誘導を感じないでもない、というかほぼ確信しているのだが、それに抗おうとしたらこの身に凄まじい重圧がかかるのである。

具体的に言うと、パラメーターのランクが3ランクも下がるくらい。第四次のサーヴァントの面子を相手に3ランクダウンは、はっきり言わなくてもキツイ。マジで死ぬ。というか即死必滅は確実だろう。

そういうわけで、俺は雁夜のサーヴァント、バーサーカーとして戦い抜かなくてはならないのだ。

ああ、面倒だ。面倒でひたすら憂鬱なんだけど、間桐雁夜という人物はまあ、嫌いではない。虚淵御大の趣味嗜好の最も色濃い犠牲者である彼には同情もするし、頑張った人が報われなきゃ話がオチねえだろうって浪花節な感傷で応援もする。

そんな奴のサーヴァントになったのは予想外を通り越してフザケンナって感じだけど、これも何かの縁、と言うには少々所ではない理不尽を感じるけども、どう否定しようともこの身はサーヴァントとなってるわけで、自分の命も懸かっているのだから、そりゃ頑張らないと駄目だろう。

しかしチート特典だって万全じゃない。転生者のご多分に漏れず、俺も戦闘能力特化型にしたせいで生産系のスキルは一切持ち合わせていない。あるのは地力の高さで原作知識か。

だから、できることとできないことを見極めなければならない。
俺は神様じゃない。力はあっても高が知れてるサーヴァントの身である。できることなんてそりゃ限られてくるだろう。

俺が骨を折るのはバーサーカー陣営の勝利のためである。俺が心を砕くのは、間桐雁夜と間桐桜のためである。保身も当然加味されるが、まあ、この二人のためなら、命も賭けられる、かも？

最悪、二人を連れてほとぼり冷めるまで冬木市を離れることも視野に入れて（元凶的にダウトかもしれないが）、一先ず目の前で事態をよく飲み込めていないマスターと意思の疎通をすることが先決だろう。

「マスター。御身の怨敵を排除いたしました」

『Fate/EXTRA』の緑茶 もとい、アーチャーのサーヴァントであるロビン・フッドと同じ美声で、俺は片膝を着いて雁夜に報告する。

「……お前……バーサーカーじゃ、ないのか？ 狂化で理性を……」

「狂化スキルは機能しておりません。ゆえに、私が理性を奪われることもありません。マスター、御身に招かれる際に詠唱に込められた望みの通り、元凶なりし妖物を滅ぼしました。後は、御身と守るべき者の傷身を癒し、この戦争に勝利を」

俺は畳み掛けるように甘言を弄する。【全て遠き理想郷】を使えば、神秘の格という力業で蟲に侵された二人の肉体を治すこともできるはずなので、嘘ではない。

そして、この聖杯戦争は俺のチートスペックだけで勝てるほど容易い殺し合いではないことなど百も承知している。令呪というマスターの支援は必要不可欠だった。

三画、いや、キャスターを殺せば四画だが、この一画については捕らぬ狸の皮算用なので慮外である。とにかく、三画のフィジカルエンチャントがあれば、征服王や英雄王を相手にしても、やってやれないこともないだろう。それ以外の消耗は許されない。

そのために俺はキャスター陣営による殺人行為を見逃すし、途中までどこかの陣営と共闘することも考える。

アーチャー陣営、論外。セイバー陣営、マスターが信用できん。ライダー陣営、真意を見抜かれても大丈夫だろうから最有力候補。ランサー陣営、中盤で落ち目なので、つけ込み易い筈？ アサシン、は【王の軍勢】で処刑確定なのでどうでもいい。キャスター陣営はできれば始末して令呪を増やしたい。

ま、全ては間桐雁夜というマスターとうまく付き合って協力するのが大前提であるが、彼は原作で見た感じ、遠坂時臣への執念を除けば真つ当な人間で、己の身の程というものを熟知している。

理をもって説き、利を挙げて訴えれば、あまり無茶な真似はしないと信じたい。

「我が名はアーサー・ウル・ペンドラゴン。狂戦士の匣で招かれはしましたが、最優のセイバーと遜色ない働きをいたしましょう。御身の名を教えていただいてよろしいか？」

俺の名乗った真名 この身体ではこう名乗るのが無難だろう？

に驚きを露わにし、雁夜は聖遺物で狙った英霊でないことを訝しむも、それでもステータス情報から、最優のセイバーに匹敵する最強の（でもないが、バツタモノとはいえ一般認知的に騎士の英霊としては最高位の一人だからハズレでもない）サーヴァントを得たと確信し、俺の問いに答える。主として応える。

「ああ……俺の名前は間桐雁夜、お前のマスターだ」

「契約はここに結ばれた。これより私は御身の剣として戦い抜き、御身に勝利と聖杯を捧げることを誓わん」

そうして俺は、打算全開の心情をおくびにも出さず、間桐雁夜のサーヴァントとして戦場に立つことを宣言したのだった。

Prologue (後書き)

【マスター】：間桐 雁夜

【クラス】：バーサーカー

【真名】：アーサー・ウル・ペンドラゴン（ルシウス・アルトリウス・カストウス）

【性別】：男性

【身長・体重】：185cm・77kg

【属性】：中立・中庸

【ステータス】 筋力 ：A 耐久 ：A 敏捷 ：A

魔力 ：A 幸運 ：A 宝具 ：A++

【クラス別スキル】

狂化：-

幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせるスキル。
ただしスキル・宝具のランク維持を優先する謎の働きが生じたため機能していない。

よってサーヴァントの理性・言語能力が失われることはもない。

【固有スキル】

対魔力：A

A以下の魔術は全てキャンセル。事実上、現代の魔術師では彼に傷をつけられない。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

直感：A

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。

研ぎ澄まされた第六感はもはや未来予知に近い。視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる。

魔力放出：A

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

竜炉開城：C（単独行動：EX）

竜の因子の恩恵たる魔力炉心の一時的な起動。常時起動は無理だが、ここぞという時に起動することで、サーヴァントの身ながら自前で魔力を生成することができる。

ただし、一度起動すると丸一日インターバルを置かなければならない。

精霊の加護：A

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立てうる戦場のみに限定される。

無窮の武練：A+

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘力を発揮できる。

カリスマ：B

軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

【宝具】

風王結界（インビジブル・エア）

ランク：B+ 種別：対人宝具 レンジ1～30 最大捕

捉：10人

不可視の剣。シンプルではあるが、白兵戦において絶大な効果を発揮する。

強力な魔術によって守護された宝具で、剣自体が透明というわけ

ではない。

また、必要に応じて剣から解くことで攻撃・防御にも転用が可能という汎用性も秘めている。さらに気圧を操作することで展開効果範囲の熱すらも操る。

約束された勝利の剣（エクスカリバー）

ランク：A++ 種別：対人・対城宝具 レンジ2～3・10～99 最大捕捉：1人・1～1000人

光の剣。人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。聖剣というカテゴリーの中では頂点に立つ宝具である。

所有者の魔力を“光”に変換し、収束・加速させる事により運動量を増大させ、神霊レベルの魔術行使を可能とする聖剣。

全て遠き理想郷（アヴァロン）

ランク：EX 種別：結界宝具 防御対象：1人
エクスカリバーの鞘の能力。鞘を展開し、自身を妖精郷に置くことであらゆる物理干渉をシャットアウトする。

天翔る聖舟の盾（プライウエン）

ランク：A 種別：対人宝具 防御対象：1～10人 移動対象：1～5人

中央部に聖母マリアの描かれたアーサー王の円形盾。伝承通り空飛ぶ魔法の船としても使用することができる。

防御・移動ともに最大効果発揮時は巨大化し、防御時はさらに結界宝具として機能する。

騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）

ランク：A++ 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：30人

およそ武器となり得る万物に触れることで、自分の宝具に変える。

宝具であれば担い手としての使用権を奪い取り、宝具でないものは自動的にランクD相当の宝具として使用することが可能となる。対象武器は薄淡い黄金の光に包まれる。

Prologue (前書き)

様々なご意見ご感想、皆様大変ありがとうございました。Ver. 1とVer. 2の折衷案的な「オリ主が並行世界のアーサー王として転生後に召喚」という考えもしなかったご意見を頂いたり、いろいろと勉強になりました。

結論を申し上げますと、Ver. 1とVer. 2を別々に書かせて頂くという形に相成りました。Ver. 1に関しては皆様のご感想でちらほら見かけた「展開が読みやすい」とのことですが、それでも要望もございましたので先にVer. 1を書き上げ、その後にじっくりVer. 2を書かせて頂くかと存じます。

筆者の主体性のなさからお騒がせいたしました、申し訳ありませんでした。両方最後まで書けるよう、頑張らせて頂きます。

Ver. 2はVer. 1が終了後、改題して再投稿という形になるかと思いますが、一応それまで残しておく形で章区分させていただきますました。ご容赦頂ければ幸いです。

感想返しは時間的・量的に執筆の方に時間を割きたく思いますので、返せないことをここにお詫び申し上げます。

あと凡人様、誤字脱字報告ありがとうございます。加筆修正とともに直させて頂きました。

Prologue

雁夜のいるそこは、間桐　マキリの腐り果てた想念が収斂された場所だった。

間桐は冬木市に棲まう魔術師の家系で、その地を治めるセカンドオーナーたる遠坂家よりも歴史のある家系である。

しかしこの家は代を重ねるごとに魔術師としての素養が確実に衰退していくという魔術の大家にとって許容できない憂き目を味わっていた。

しかしどれだけ打開策を講じようとも一向に実を結ばず、間桐の血に連なる者は櫛の歯が欠けてゆくように徐々に魔術回路の数を減らしていき、最も年若い末裔においては魔術回路をただの一本ももたずに生まれる始末。

初代の当主が未だ健在とはいえ、間桐の家系は確実に滅びの一端を辿っていた。

そこへ苦肉の策として執られたものこそ、優れた家系　この場合は後継者を余らせ、尚かつ娘の稀有な才能を狙われんと、娘の将来に危機感を抱く遠坂家当主時臣の子を養子に取ること、次代以降の血に期待しようというものだった。

もっとも、遠坂時臣は間桐で娘がいかなる扱いを受けるのか、到底知る由もない。

これについては雁夜自身も疑問が尽きないが、時臣がそれを知ることができるという可能性を考慮するのは、彼の人物を過大評価するに等しいことだろう。

長年に渡り周辺一帯で人食いを為してきた間桐臓硯の所業に気付

くこともできず、みすみすそのような当主の巣くう間桐の邸に愛娘を差し出してきたのだ。度し難い無知、認識の甘さだった。

臓硯の秘匿と隠蔽が優れているという点を考慮しても、土地を統べるセカンドオーナーとしては杜撰に過ぎる事態である。

時臣自身、時計塔での修学経験から魔術師の穢さも相応に味わったはずであろうに、己の掲げる魔術師の誇りとやらを、間桐も当然有しているとして盲信できようか。互いに聖杯戦争における始まりの御三家の一角となっているせいで、微塵も疑うこともないのだろう。

その結果が、蟲に身も心も嬲られ冒された幼い少女 間桐桜の現況だった。

間桐の業を忌み嫌い蟲をその身に宿す前に間桐から逃げ出した雁夜は、桜をこの地獄から救い出すために、自らの掲げた条件を満たすために、無力な我が身を悪魔に差し出した。

彼の掲げた条件とは、第四次聖杯戦争で聖杯を間桐に持ち還るというもの。そして、聖杯を持ち還るということは聖杯戦争にマスターとして参加し、サーヴァントを召喚することである。

しかし、間桐雁夜はマスターとなる以前に魔術師ですらない。間桐の素養は近年衰退し続けて来た間桐の血を色濃く回復させた才を備えているといっても、出奔し逃げ出した落伍者に過ぎない。これではせつかくの才も役に立たず、聖杯戦争まで残り一年という期間で練磨するには、到底時間が足りなかった。

ゆえに己が命を捨てる覚悟から、無謀な決断が為されてしまう。無茶な決意を叶えるためには、代え難い代償が必要だった。雁夜は、等価の無茶をその身で受け入れることとなる。

十年分でも足りない密度の鍛錬、拷問のような蟲責めの苦行をわずか一年足らずで肉体に刻み込まれる。致死の苦痛を受け入れ続け、雁夜の容姿は日を追うごとに、凄愴なまでの死に体へと変貌してい

った。

黒一色だった髪は色が抜けて総てが白髪となり、皮膚は生気の感じさせない土気色へと変わっていき、元々細身の五体は枯れ木のごとく萎びていく。

外観以上に変じたのが臓腑を始めとした体内器官である。各臓器は全身に配された刻印虫が巣くい、神経組織すら犯された全身は常時耐え難い激痛に苛まれる。

ついには片足が不自由となり、顔の左半分は白濁した眼球が失明し、さらに表情を浮かべるための筋繊維が歪んで引き攣れ固まっていた。

異様な形相を戻すこともできず、傷身の悲惨さが滲み出る面貌は常の仮面として剥がすことなく顔に貼り付いていた。

これほどまでの無茶な肉体変成によつて寿命は削りに削られ、余命は残すところおよそ一ヶ月足らず。間桐雁夜の命は、まさに風前の灯火だった。

だが、それで充分だった。桜を助けるためならば、この命で救い出せるのならば、飲んで懸けてやろうじゃないか。

そしてみすみす桜を地獄へ追いやった遠坂時臣へ思い知らさなければならぬ。この命に代えても、と言いたいところだが、時臣の始末はあくまで通過点に過ぎない。時臣を屠った後、必ずや聖杯を持ち還るのだ。

聖杯さえあれば、当主である臓硯も文句あるまい。それに願望機の力なら、桜を癒すことも叶うはずだ。

それは一縷の希望、彼の甘さが懷かせた矮小な胸算用であつたが、己が間桐の業から逃げたことが因となつて桜を苦しめたことへの贖罪と自責、桜を苦しめる決定打を断行した時臣に対する怒りと復讐心、そこに桜の身体、延いては心を癒すという希望の芯が通ること

何という傷痛であろうか。この一年の多種多様な蟲によって無理矢理に培わされた、なけなしの耐痛感覚が意味を成さないほどの激甚なる痛みだった。

しかし止めるわけにはいかない。今はただひたすらに耐えきらなければならぬ。

雁夜はまだ聖杯戦争のスタートラインにすら立っていないのだ。サーヴァントを召喚する中途の段階で根を上げるわけにはいかなかった。彼にとって退路など、既に破却済みのものなのだから。

「誓いを此処につ、我は常世全ての善となる者つ、我は常世全ての、悪を敷く者つ！」

肚に力を入れ、血を吐くような叫びで詠唱は続けられる。ただの一小節ですら渾身の意気を込めねば、意識ごと蟲どもに全てを持って行かれてしまう。そう、命すらも。

決して慣れないおぞましい蟲たちの助力に魂で縋り付き、雁夜はつい先ほど追加で詠唱するように命じられた狂戦士召喚の二小節を言霊に挟む。

魔術師としては極めて急造品である雁夜は他の参加マスターに較べ、その格と力量は大きく劣る。

ただでさえ聖杯戦争に喚び出される英霊は、サーヴァントの枠に嵌められる段階で弱体化を余儀なくされるというのに、マスターが彼であるというだけでさらにパラメーターは低下するのは、火を見るより明らかだった。

この不利を覆すためという正当な理由の下に言い渡されたのが、サーヴァントの狂化スキルによる性能強化措置であった。

もつとも、命じた臓硯はバーサーカーとなったサーヴァントに魔力を搾り取られ、藻掻き苦しむ雁夜の姿を肴に快楽を貪るのが目的だった。

その果てに雁夜が自滅するとしても臓硯は全く動じないであろう。臓硯にとって、雁夜は期待するのもおこがましい不出来の玩具。今回の聖杯戦争に賭けた捨て銭でしかないがゆえに。

片眼となった右の視界から赤い雫が零れ落ちる。既に雁夜にとって馴染み深くなった血の涙だった。

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍べるべしっ！ 汝、狂乱の檻に囚われし者っ、我はその鎖を手繰るものっ！！」

血泡が口端から零れ落ちる。喀血か吐血かまたは両方が、刻一刻と全身の毛細血管が破裂していき、ついには皮膚をも裂き破って彼の身と衣服を朱で彩る。

眩く発光する魔方阵に向けて、死に瀕する中で雁夜はその血を振り払うように祈りを捧げた。

力を欲した。聖杯戦争に勝ち残る力を。遠坂時臣にこの憤激を思い知らせる力を。桜を救うに足る絶大な力を。

痙攣し、倒れそうになる五体を無理矢理に持ち堪え、喉の裂けるような悲痛な声音で最後の小節まで、一気に詠唱することを踏み切った。

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣につ！ 聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよっ！ 汝三大の言霊を纏う七天っ抑止の輪より来たれっ、天秤の守り手よオっ！！」

魔力が、大気が陣の内側で荒れ狂う。英霊の座に繋がりし特異点となったソコに、人ならざる人、人の身で人より上の位階に召し上げられた者、人の存在から精霊の位階へ上り詰めた超越者、ガイアとアラヤにのみ使役が許された英霊と呼ばれる存在が召喚された。

エーテルの本流が凝縮された陣の中に顕現したのは、長身の男性

だった。

鮮やかな金髪、絶世の美丈夫といっても過言ではない優れた容貌、均整の取れた肉体に青き軍装と白銀の鎧を身に纏い、清流のような静謐な存在感を威圧することなくその身より滲ませていた。

七つのクラスに招かれ、現界を果たした眼前のサーヴァントは、まぎれもなくバーサーカークラス。しかし、過去三度の聖杯戦争で確認された混沌とした負の想念が一切感じられないことに、六百年を生きる怪魔術師は訝しむ。

サーヴァントからは否定のしようもない全き王者の威厳が漂っていた。捉え切れない英雄の威風が吹いていた。最高位の英霊にのみ許される至上の華が見て取れた。

臓硯が雁夜の喚び出す英霊に選んだのは、「至高の騎士」であると同時に「裏切りの騎士」である円卓の騎士最強の英傑、湖の騎士ランスロットであった。

しかし、臓硯は、また彼にその聖遺物を用立てた者は、自分たちの大きな認識の間違いに気付くことが出来なかった。

湖の騎士の聖遺物として用意した外套の切れ端は、その実アーサー王の外套だったのだ。だが、それがアーサー王　アルトリア・ペンドラゴンを召喚するという事態を招くことはいざなかった。同時刻、アインツベルンでその当の英霊が最優のクラスであるセイバーとして召喚されていたからだ。

何より、その外套は戦場で騎士王が纏いし象徴的な軍装であり、軍旗同様、その外套もまた軍そのものを象徴する物品でもあった。軍を率いるアーサー王本人よりも、王が率いた彼ら騎士団一兵卒各々が、王の背に向ける無数の想念が、無尽の魂魄としてその聖遺物に宿っていたのだった。

ゆえに、その切れ端で召喚されるのはアーサー王本人ではない。アーサー王とともに戦場を駆けた全ての者の思念、その総算が具象

化した存在でなければならない。その殻を被るに相応しい、幻想のヒトガタに結実されなければならない。

其は誰よりも完璧な王であり、其は何者よりも完全な騎士であり、其は何人よりも壮烈な戦神であった。

まさに歴史を築いた本物よりも王らしく、史実のアーサー王よりも騎士らしい最高の理想像。

その想念、当時を生きた円卓の騎士団を含めたブリテンの民の祈りと願いが注がれ、さらに後世の信仰によって助長された概念が顕現せし存在が、狂化のスキルに負けようはずがあるであろうか？

クラスは確かにバーサーカーとして招かれている。しかし、狂化スキルは機能することなく無為のものと成り果てていた。騎士王と狂乱、この二つは相容れないのである。

結果、パラメーターを底上げするスキルの恩恵も得られないが、この場に喚び出されたバーサーカーにパラメーターの底上げなど無用の長物だった。

知名度により変動する地形効果、マスターの力量に影響される現界時の性能、それらはなるほど、確かに彼の者を弱体化せしめているだろう。

だが、完全無欠の騎士王として象られた存在は、弱体化してなお最強のステータスを誇っていた。

聖杯よりマスターである雁夜に与えられし透視力、それによって得られるサーヴァントのステータス情報を雁夜の身内に蠢く蟲から伝えられ、臓硯は瞠目した。

狂化することなくこうもAランクの揃う各パラメーター、多種多様なスキルに次いで登録される多彩な宝具の数々。なんと規格外なことであろうか。

このサーヴァントは、三度の聖杯戦争を経験した間桐臓硯をして、空前絶後の高いステータスを備えていたのだ。

この超性能の前では、湖の騎士が召喚されなかった結果や、狂化スキルが効果を発揮していない事態など些末事に等しかった。

同時に余計な欲も湧き上がる。己自身がこのサーヴァントのマスターとなれば、今回の聖杯戦争にて悲願を成就することも容易いのではないか。

しかし、狂化スキルを打ち消す固有スキルの詳細から、臓硯はこのサーヴァントが主替えを是としないこともまたその価値と同時に痛感していた。

これを曲げさせるならば、最悪令呪の全てを費やさなければならぬだろう。令呪とサーヴァントシステムを考案し、実装させた間桐臓硯だからこそできた正確な予想だった。

なんと面憎く口惜しいことか。だが、マスターが雁夜であるならばこの老骨に幾らでも遣りようはある。何せ雁夜の勝利条件とは臓硯の下へ聖杯を持ち還ることであり、その悲願は臓硯の手中に陥る桜の解放であるのだから。飴と鞭を的確に用いることで臓硯主導の下、聖杯戦争を勝利することも可能だろう。

六百年の歴史をその身で体现する臓硯は、仄暗い思惑を虎視眈々と懐きつつ、間桐の今代のマスターとサーヴァントの儀式の詰めを見守った。

この二人は大事な大事な手駒である。片方は前代未聞の貴重で稀有なまでの兵器であった。そしてそれを統べるのは間桐の当主たる己であることを確信して、心中でほくそ笑む。不老不死を得るのもあとわずか、その時は間近に控えているのを幻視する。

バーサーカーの閉じられていた瞼が開かれ、狂戦士のクラスに似つかわしくない、超然とした理性を映す碧き双眸が雁夜を射貫いた。

「問おう。御身が我が主か？」

まるで至高の楽器が奏でたかのような、老若男女の全てを惹き付ける爽やかな美声が、召喚主である雁夜の答えを求めている。

雁夜はバーサーカーを召喚したはずであるのに、眼前のサーヴァントは全く狂った素振りを見せず、知性の輝きを称える瞳を彼に向けて問い掛ける事態に、痛みも忘れて驚愕していた。

だが、呆けたのも数瞬程度の間、彼は痛む身体をふらつかせつつも、意志の光だけは負けじと視線に乘せてバーサーカーらしきサーヴァントを見上げ、特別肚に力を込めて宣言した。

「……ああ、俺が、お前のマスター……間桐、雁夜だ」

「諾なおう」

サーヴァントはその場に片膝を着き、片腕を胸元に掲げて瞼を伏せる。

水が低きに流れるような洗練された自然の動作、長身より溢れ出でる清澄な気配が、不浄の地下室の空気を緩やかに、穏やかに浄化する。

そして巖のごとき堅い荘厳な声音で、契約の言霊が交わされた。

「サーヴァント・バーサーカー、真名をアーサー・ウル・ペンドラゴン。今この時より、我が身は御身の剣となって敵を討ち滅ぼし、御身の盾となつて御身と御身の守りし全ての者を御守りいたします。この身は聖杯に託す願いはなけれど、今生は一介の騎士として御身へ無二の忠誠を誓わん」

半死人にして魔術師の紛い物である間桐雁夜が、湖の騎士以上に得難い最強の英霊の主となった瞬間であった。

Prologue (後書き)

【マスター】：間桐 雁夜

【クラス】：バーサーカー

【真名】：アーサー・ウル・ペンドラゴン（ルシウス・アルトリウス・カストウス）

【性別】：男性

【身長・体重】：185cm・77kg

【属性】：秩序・善

【ステータス】
筋力：A 耐久：A 敏捷：A

魔力：A 幸運：A 宝具：A++

【クラス別スキル】

狂化：-

幸運と魔力を除いたパラメーターをランクアップさせるスキル。
ただしこのスキルは現在機能をしておらず、よってサーヴァントの理性・言語能力が失われることはもない。

【固有スキル】

無欠の騎士道：EX

騎士道に反する所業言動の類を執ること能わず。理想・夢想の中にしかない「誉れ高い騎士の王」であれという概念が結晶化したスキル。

このスキルがある限り、狂化スキルを始めとした精神に作用するいかなる魔術・スキル・宝具も同ランクの神秘が伴わない限り無効化される。

直感：A

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。

研ぎ澄まされた第六感とははや未来予知に近い。視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる。

魔力放出：A

武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって、能力を向上させる。

竜炉開城：C（単独行動：EX）

竜の因子の恩恵たる魔力炉心の一時的な起動。常時起動は無理だが、ここぞという時に起動することで、サーヴァントの身ながら自前で魔力を生成することができる。

ただし、一度起動すると丸一日インターバルを置かなければならない。

精霊の加護：A

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

その発動は武勲を立てうる戦場のみに限定される。

無窮の武練：A

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。

理想像である騎士王こそ無双という概念から生じたスキル。

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘力を発揮できる。

カリスマ：B

軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

騎乗：C

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなす。そして最もこのスキルを発揮するのは騎馬に乗った時である。

【宝具】

インヒジブル・エア
風王結界

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ1～30 最大捕捉：10人

姿を透明化させる逸話を持つ外套が宝具化したもので風の魔力そのもの。

これによって剣を不可視状態にすることで、シンプルではあるが、白兵戦において絶大な効果を発揮する。

もっとも、崇高な騎士道を往く騎士王は敢えて不可視の状態で用いることを由としない。

また、必要に応じて剣から解くことで攻撃・防御にも転用が可能という汎用性も秘めている。さらに気圧を操作することで展開効果範囲の熱すらも操る。

約束された勝利の剣 エクスカリバー

ランク：A++ 種別：対人・対城宝具 レンジ2～3・10～99 最大捕捉：1人・1～1000人

光の剣。人造による武器ではなく、星に鍛えられた神造兵装。聖剣というカテゴリーの中では頂点に立つ宝具である。

所有者の魔力を“光”に変換し、収束・加速させる事により運動量を増大させ、神霊レベルの魔術行使を可能とする聖剣。

全て遠き理想郷 アウアロン

ランク：EX 種別：結界宝具 防御対象：1人

エクスカリバーの鞘の能力。鞘を展開し、自身を妖精郷に置くことであらゆる物理干渉をシャットアウトする。

天翔る聖舟の盾 フライウエン

ランク：A 種別：対人宝具 防御対象：1～10人 移動対象：1～5人

中央部に聖母マリアの描かれたアーサー王の円形盾。伝承通り空飛ぶ魔法の船としても使用することができる。

防御・移動ともに最大効果発揮時は巨大化し、防御時はさらに結界宝具として機能する。

騎士王は得物を選ばず（キング・オブ・オーナー）

ランク：A++ 種別：対人宝具 レンジ：1 最大捕捉：30人

槍、剣、短剣を始め近接戦闘用の騎士の武装と成り得る武具、それも武器として完結した器物であるのならば、ある例外を除き、いかなる武器であろうとも自身の宝具に変える。

例外は担い手の現存する宝具であり、その使用権を無理矢理に奪うことはできない。

所有されるだけで担い手の存在しない宝具であれば、己の宝具として使用権を行使することができる。

また、宝具でないものは自動的にランクD相当の宝具として使用することが可能となる。

対象武器は薄淡い黄金の光に包まれる。

湖の騎士のように万物に効果を発揮する能力ではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776y/>

欲張ったら騙されて？ 戦争の渦中に落ちちゃいました…。

2011年11月17日18時25分発行